

平成19年6月1日発行
通巻380号
発行(社)日本オーディオ協会

Japan
Audio
Society

JAS

journal

2007
Vol. 47

No 5 & 6

- JAS インフォメーション
平成19年度通常総会報告
平成19年5月度理事会・運営会議報告、6月度理事会報告
- 連載：テープ録音機物語
その25 第二次大戦後の欧州(2) 阿部 美春
STUDER / REVOX -1-
- イベント・レポート
ドイツ、ハイエンド・ショー2007を訪ねて 森 芳久
—写真で見る音の饗宴—
- メンバーズプラザ
自薦ソフト紹介(音楽ソフト) 大林 國彦
自薦ソフト紹介(ビデオソフト) 大林 國彦
- 協会事業関連資料集
平成18年度事業報告書
平成18年度収支計算書
平成19年度事業計画書
平成19年度収支予算書
平成19年度役員名簿
平成19年度協会組織図



社団法人 日本オーディオ協会





(通巻 380 号)

2007 Vol.47 No.5・6 (5・6 月合併号)

発行人：鹿井 信雄

社団法人 日本オーディオ協会

〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9

電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207

Internet URL

<http://www.jas-audio.or.jp>

C O N T E N T S

JAS インフォメーション

3 平成 19 年度通常総会報告

5 平成 19 年 5 月度理事会・運営会議報告、6 月度理事会報告

連載：テープ録音機物語

6 その 25 第二次大戦後の欧州 (2) 阿部 美春
STUDER/REVOX -1-

イベント・レポート

12 ドイツ、ハイエンドショー2007を訪ねて 森 芳久
—写真で見る音の饗宴—

メンバーズプラザ

18 自薦ソフト紹介 (音楽ソフト) 大林 國彦

19 自薦ソフト紹介 (ビデオソフト) 大林 國彦

協会事業関連資料集

20 平成 18 年度事業報告書

21 平成 18 年度収支計算書

22 平成 19 年度事業計画書

23 平成 19 年度収支予算書

24 平成 19 年度役員名簿

25 平成 19 年度協会組織図

5・6 月合併号をお届けするにあたって

6 月 7 日開催の (社) 日本オーディオ協会通常総会において承認された平成 18 年度の事業報告ならびに平成 19 年度の事業計画を掲載する都合で 5・6 月合併号の発行が遅れたことをお詫びいたします。

会員の皆様のご支援・ご協力のお蔭で、本 JAS ジャーナル誌の体裁は紙媒体から電子媒体に変わりましたが、年 4 回の特集号および通常号を引続き発行させていただきます。

本年度は事業計画にもありますように、「日々に進化するオーディオ・オーディオビジュアル技術」「携帯 (メモリー) オーディオからホームオーディオ・カーオーディオへのステップアップ」「デジタル放送等のサラウンド・サウンド」等のご紹介に力を入れ、また温故知新の観点から、阿部 美春氏の連載「テープ録音機物語」をお手本とするオーディオ技術の体系的な記録・保存にも留意してまいります。

☆☆☆ 編集委員会委員 ☆☆☆

(委員長) 藤本 正熙 (委員) 伊藤 博史 ((株) D&M デノン)・大林 國彦・蔭山 恵 (松下電器産業 (株))

北村 幸市 ((社) 日本レコード協会)・高田 寛太郎 (アムトランス(株))・豊島 政実 (四日市大学)

長谷川義謹 (パイオニア (株))・濱崎 公男 (日本放送協会)・森 芳久・山崎 芳男 (早稲田大学)

JAS Information

平成 19 年度通常総会報告

平成 19 年 6 月 7 日 11 時より、トスラブ赤坂において役員・会員 43 名出席（委任状提出会員 275 名）のもとに平成 19 年度日本オーディオ協会通常総会が開催され、引き続き来賓も参加された懇親会が開催されました。

～通常総会議事～

総会においては次の 5 議案が上程され承認されました。それぞれの内容は本号巻末の協会事業関連資料集に掲載しましたのでご覧下さい。

第 1 号議案 「平成 18 年度事業報告の承認を求める件」

第 2 号議案 「平成 18 年度収支決算報告並びに監査報告の承認を求める件」

平成 18 年度はほぼ計画に沿った事業が行われ、一般会計、特別会計ともに収支バランスが計画を上回ったことが報告され承認されました。つづいて監事より監査結果が報告され承認されました。

第 3 号議案 「平成 19 年度 事業計画の承認を求める件」

第 4 号議案 「平成 19 年度 収支予算の承認を求める件」

オーディオおよびオーディオビジュアルに関する普及・啓発活動を行う事業計画案と、予算案が説明され承認されました。

第 5 号議案 「役員交代の承認を求める件」

前回の総会以降の役員交代について、理事 5 名の交代が承認されました。

山内慶一理事・副会長 → 校條亮治理事・副会長

三村益一郎理事・副会長 → 中沢隆平理事

片山幹雄理事 → 寺川雅嗣理事

北川直樹理事 → 三ツ木宏理事

澁谷敏旦理事 → 加藤裕一理事



通常総会 会場風景

～懇親会～

通常総会ならびに 6 月度理事会終了後、経済産業省 商務情報政策局 情報通信機器課 横尾英博課長様、同課 企画調整官 梅沢茂之様、同課 宮崎卓行 AV 機器係長様をご来賓にお迎えして懇親会が開かれ出席会員間の交流を深めました。

鹿井会長より「これからは音を楽しむライフスタイルづくりの啓蒙と普及が更に重要となり、協会はオーディオ復権のための諸活動に取り組みたい」と挨拶されました。

来賓を代表して経済産業省 横尾英博課長様に御挨拶をいただきました。

「新春の集いでは日本オーディオ協会に期待することとして、広く（音の楽しみの普及）と深く（音へのこだわりの追求）の話をさせていただきましたが、その後の動きを見てみると、広くにおいては、携帯音楽プレイヤーの普及、また深くでは高機能、高音質で比較的求め易い値段でのオーディオコンポが生まれ、高性能のスピーカーも出てきています。本来この広く・深くは融合していくべきであろうと思います。

サラウンド・サウンドも大画面のテレビとともにより良い音を聴くために JEITA と日本オーディオ

協会が連携して更なる普及活動に努めてほしいと思います。

先月、経済産業省では「感性価値創造イニシアティブ」を策定しました。従来の価値軸（性能・信頼性・価格）に加えて、第4の価値軸として「感性価値」に着目し、生活者の感性に働きかけ物語としての共感・感動を得ようという価値軸でとらえていくもので、2010年までを「感性価値創造イヤー」と定め、感性価値創造の実現に向けた施策を行ないます。

これは、オーディオ産業が発展していく上でも合致するものと信じ、オーディオ復権の実現に向けて共に頑張っていきたいと思います。」



横尾課長様の御挨拶

周田副会長の音頭で乾杯のあと、交代された新役員の皆様のご紹介がありました。



懇親会 会場風景



校條副会長の御挨拶



中沢副会長の御挨拶



三ツ木理事の御挨拶

JAS Information

5 月度理事会・運営会議報告、6 月度理事会報告

5 月度理事会報告

平成 19 年 5 月 23 日に 5 月度理事会が理事 27 名の出席（代理出席および委任状提出を含む）のもと日本オーディオ協会会議室で開催され平成 18 年度事業報告案が審議され承認されました。

（第 1 号議案）平成 18 年度事業報告案の承認を求める件

平成 18 年度事業報告案が事務局より説明され、来る 6 月 7 日（木）11 時より東京・トスラブ赤坂にて開催予定の通常総会に上程することが承認されました。

（第 2 号議案）平成 18 年度収支決算案並びに監査報告の承認を求める件

平成 18 年度収支決算案が事務局より説明され、引き続き畑仲監事より監査報告が行われ、通常総会に上程することが承認されました。

（第 3 号議案）平成 19 年度修正予算案の承認を求める件

平成 19 年度収支予算案は 3 月 28 日の理事会にて審議され承認されましたが、平成 18 年度収支決算案が承認されたことに伴い、平成 19 年度収支予算案の中の前年度実績部分を修正した予算案を通常総会に上程することが承認されました。

（第 4 号議案）役員交代の承認を求める件

当理事会以降、通常総会までの間に、役員交代の申し出がある場合には、通常総会に上程することが承認されました。

（第 5 号議案）新会員の承認を求める件

3 月 29 日以降、5 月 23 日までに入会の申込みが

あった個人正会員および法人賛助会員の入会が承認されました。

（個人正会員）2 名（氏名省略）

（法人賛助会員）1 社（株式会社ソナ）

なお、この間に個人賛助会員 41 名が入会したことが事務局より報告されました。

5 月度運営会議報告

4 月 26 日に発足した普及推進部会サラウンド・サウンドワーキンググループについて事務局より報告され意見交換が行われました。

ワーキンググループは普及推進部会より参加希望のあった 12 社のメンバー（主査：渡邊哲純氏（日本ビクター））で構成され、サラウンド・サウンドの啓蒙のために協会が取り組むべき活動についての作業が始まりました。

手始めにユーザーの認識や嗜好を把握するためのアンケート調査の実施を決め、詳細をつめています。

6 月度理事会報告


平成 19 年 6 月 7 日の通常総会終了後に、トスラブ赤坂において 25 名出席（代理出席および委任状提出を含む）のもとで 6 月度理事会が開催されました。

（第 1 号議案）新会員の承認を求める件

5 月 22 日より 6 月 4 日の間には承認を求める入会者が無いことが事務局より報告されました。

（第 2 号議案）役員交代の承認を求める件

三村 益一郎 理事 副会長の退任にともない、中沢隆平 理事が副会長に選任されました。



連載

「テープ録音機物語」

その25 第二次大戦後の欧州 (2)

STUDER / REVOX -1-

あべ よしはる
阿部 美春

1. まえがき

1940年代、マグネトホンに始まったテープ録音機の歴史の中で、戦後逸早くスイスで生まれたスチューダー・ルボックスは、米国のアンペックスとともに数々の名機を世に送り出した。戦後・欧州のテープ録音機を紹介するなかで、特筆にあたいするブランドの一つである。今回(第2回目)はスチューダー・ルボックスの黎明期をとりあげることにした。

表24-1にスチューダー・ルボックス社(以下スチューダー社とよぶ)の主な歴史(1948-1968)を、表25-2にテープ録音機とミキサーの機種別年表(1949-1968)を示す(201)-(209)。

年	記事
1948	1月、Willi Studer 社スイス・チューリッヒに設立、特殊なオッシロスコープを開発、製造、従業員3名
1949	テープ録音機 Dynavoxを開発、
1951	テープ録音機の販売会社"ELA AG"を設立、プロ用テープ録音機 Studer 27を試作、ルツェルン(Lucerne)国際音楽祭に試用し、成功を収める Dyanavox を Revox に改名、T26型を発表
1952	Studer 27型生産開始、従業員32名
1954	Revox A36型を発表
1955	Studer A30 と B30 発表
1957	Studer B30型ポータブル・テープ録音機を発表 Revox B36型3ヘッド式テープ録音機を発表
1958	Studer 69型ポータブル・ミキサーを発表 Revox C36型発売
1960	Studer C37型2チャンネル・テープ録音機、生産開始 Revox D36型ステレオ・テープ録音機、生産開始 EMT Wilhelm Franz GmbHと業務提携
1961	Revox E36型発売
1962	Revox F36型発売
1963	Revox G36型発売
1964	Studer J37型 1"4トラック・テープ録音機発表
1965	Studer A62型(Studer最初のトランジスター式)を発表 Revoxモデルの生産は総計50,000台に達する。
1967	ビートルズの録音にStuder J37型 4トラックが使われる RevoxA-77型とA-50アンプ、A76FMチューナーを発表
1968	Regensdorf, Zurich に工場建設 Studer 従業員560名になる
1970~	つづく

表 25-1 Studer / Revox 社の主な歴史
(1948-1968)

年	テープ録音機		ミキサー
	Studer	Revox	Studer
1949		Dynavox	
1951		T26	
1952	27		
1955	A37 & B37		
1956		A36	
1957	B30	B36	
1958	C36		69
1960	C37 (2track)	D36 (stereo)	
1961		E36 (UK version)	
1962		F36	
1963		G36/736(UK ver)	
1964	J37 (4 track)		
1965	A62 (トランジスター式)		
1967		A77 (トランジスター式)	
1968			089/189

表 25-2 Studer / Revox の機種別年表
(1949-1968)

2. Studer / Revox の誕生 (201)-(210)

スチューダー社は1948年1月にスイスのチューリヒにヴィリー・シュトゥーダー (Willi Studer, 1912-1996)によって設立された^{*1}。最初の仕事は特殊なオッシロスコープ10台の受注であった。従業員わずか3名で資金的にも苦しい日々であったという。間もなくして、米国からテープ録音機の輸入を試みる。W.スチューダーの回想録では、米国ブランド名には触れてはいるが、時期的にはブラッシ社のテープ録音機サウンドミラー (BK-411型)ではなかったかと推察される。本物語その6でも述べたが、後年W.スチューダーがブラッシ社のJ.ビーガンとの会話^{*2}で、「ブラッシ社のサウンドミラーは音楽や音声を録音するためにより専門的に作られたテープ録音機である。そしてスチューダーをしてテープ録音機を作るよう促したのがサウンドミラーである」と語っている⁽³¹⁾。

米国製テープ録音機は電源が米国の117V、60Hz仕様であるため、スイスの220V、50Hzに変更しな

ければならなかった。周波数の変更にはキャプスタンシャフトの他、フリクション・プリーとローラーまで交換しなければならない。結果として、米国からはキャプスタン・シャフト他、主要部品を 500 台分購入し、スチューダー社の改造による最初のテープ録音機ダイナボックス(Dynavox)が誕生することになる(写真 25-1)^{*3}。

この Dynavox は 1 モーター、 2 ヘッド式、テープ速度は 7-1/2 インチ/秒、フルトラック、性能的には録音テープとの不整合もあってか、お粗末であったという。しかし、当時として、テープ録音機は珍しく、ビジネスとしては成功したようである。スチューダー社はこれを機に、本格的なテープ録音機の開発に乗り出すことになる。

ダイナボックスの生産のために従業員も当初 6 人から 25 人に増やし、量産体制の準備にとりかかった。ヘッドも自社製であった。まだこれといった測定器もなく、ワウ・フラッターは電話の発信音でチェックしたという。

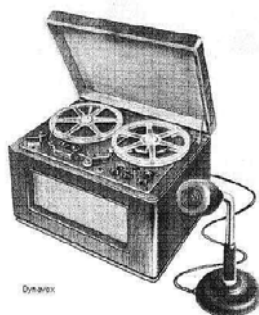


写真 25-1 Dynavox (202)

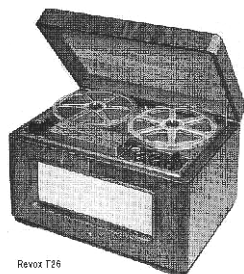


写真 25-2 Revox T26 (203)

Dynavox の経験を生かし、スチューダー社自身による再設計と部品の製造で、ブランドもルボックス(Revox)に変えて、1951 年に T26 型を発売した(写真 25-2)。同時に、Revox 製品の販売を担当する会社“ELAAG”(後の Revox Ela AG)も設立した。

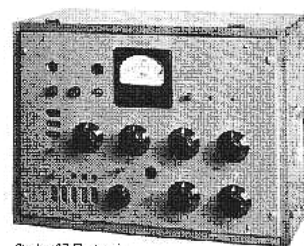
T26 型は次の A36 型に代わるまでに日産 3~10 台、1954 年まで合計約 2500 台作っている。価格は SFr. 1395 (スイス・フラン)とある。当時としては、たいへん高価であったように思われる。主な仕様を

表 25-3 に示す。

項目	仕様
ブランド/型番	Revox T26
年	1951-1955
トラック形式	フルトラック
ヘッド	2
モーター	1
最大リール	10"
テープ速度	7-1/2 ips
周波数特性	±3dB, 70-8kHz
SN比	45dB (unweighted)
真空管	6本
入力	マイク、ラジオ/ホノ(ミクス可能)
重量	18kg

表 25-3 Revox T26 型の主な仕様 (197)

Revox T26 型が発売された年、プロ用のテープ録音機 27 型を開発した。試作品のテストはスイス放送局に持ち込み、この年ルツェルン (Lucerne)で開催された国際音楽祭で試用した。大成功であった。翌 1952 年、Studer 27 型^{*4}(写真 25-3)は本格的生産(100 台)となる。スチューダー社の従業員は 32 人になった。



Studer 27 Beacornis



Studer 27 Transport

写真 25-3 Studer 27 (203)

(注*1) 設立時の社名は“Willi Studer”,その後 1980 年代になって AG (株式会社)がついて“Willi Studer AG”となる。現在は “Studer Professional Audio GmbH”, 日本の現地法人はスチューダー・ジャパン株式会社とよんでいる。

(注*2) 余談になるが、ドイツから移民のアメリカ人J.ピーガン氏と、スイスのドイツ語圏に在住するW. スチューダー氏との会話は自ずとドイツ語になり、技術者であるお二人の親交はさらに深まったのではと推察する。

(注*3) この写真は後日入手したスチューダー社の資料によるものである。本物語その24で写真24-8を他の資料によってDynavoxとして掲載したが、この写真はStuder27の誤りであることが判った。ここに謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(注*4) この頃からスチューダー社は一般用テープ録音機をRevoxブランド、プロ用テープ録音機はStuderブランドを使うようになった。

一般にドイツ語圏ではプロ用に対してアマチュア(Amateur=英語のアマチュア)用と呼び、米国ではコンシューマー(Consumer)用、英国ではホーム(Home)用、日本では一般用または家庭用と呼んでいた。また、英語圏では一般用でもプロに準じた高級なテープ録音機はセミプロ(Semiprofessional)と呼んで区別していた。後にHiFi(ハイファイ)という言葉が世界的に流行し、ホーム用でも高級な機器にはHiFi用という表現が一般化してきた。HiFi用が大衆化すると、今度はハイエンド(High-End)という表現で差別化するようになった。

3. Revox 36 シリーズの変遷 (197)(206)

ルボックスはT26型に代わって1955年にA36型を発売した。以降、B型、C型と改良され、1960年になってステレオのD型に代わる。そしてE型、F型、G型と改良される。36シリーズの最後となったG36型は1963年から1967年まで続き、デザインを一新したA77型にバトンタッチする。Revoxブランドの製品は途中1965年の時点で総数50,000台に達していた。表25-4に36シリーズのモデル毎の主な仕様を一覧表にまとめてみた。構造、性能的にも入出力条件を別にすればプロとして十分通用するテープ録音機であった。

A36型：36シリーズ最初のルボックスA36型は1955年に発売された(写真25-4)⁽²⁰³⁾。ヨーロッパ的设计で、構造的にもスイスらしい精巧さが感じられる機械である。

テープ駆動機構は3モーター式、モーターはアウトローター型で有名なドイツのパプスト(Papst)社を使用、キャプスタン駆動は6極・12極の2スピード・ヒステリシス・シンクロナス・モーターによるダイレクト駆動である。テープ速さは7-1/2インチ/秒と3-3/4インチ/秒の2スピード、キャプスタ

型番	A36	B36	C36	D36	E36	F36	G36
年 備 格 (S.Fr)	1855 990	1956 990	1958 990	1960 1045	1961 1160	1962 1180	1963-1967 1285
トラック形式	half mono	half or full ←	← ←	2 stereo	2 or 4 ←	← ←	← ←
ヘッド	2	3	←	←	←	←	←
モーター	3	←	←	←	←	←	←
リール(最大)	10"	←	←	←	←	←	10.5" NAB
テープ速さ	7.5/3.75ips	←	← or 15/7.5ips	←	←	←	←
周波数特性	@15ips @7.5ips @3.75ips	40-12kHz ←	← ←	← ←	40-15k 40-12kHz	← ←	← ←
ワウ・フラッター	@7-1/2	0.15%rms	←	←	±0.1% p-p	←	←
SN比	2track	>50dB	←	>50dB	>50dB	←	>52dB
クロストーク	mono stereo	←	←	55db 50dB	← 40dB	← ←	← ←
バイパス周波数	←	←	←	←	70kHz	←	←
巻戻し速さ	2400ft.tape	90s	←	←	80s	←	←
入 力	mic radio/phono aux	2.5mV 250mV 10-500mV	←	←	0.1mV, 80mV ←	← ←	3mV 50mV 50mV
出 力	line speaker out 出力管	← 3.5W EL84 single	←	1-1.5V 3W,5Ω ECL80 pp	1V ← ECL82 pp	← ←	0.7/0.5V ← ←
スピーカー	←	←	←	←	←	6W,mono ECL86 pp	←
重 量	21kg	←	←	←	22.7kg	←	20.5kg
寸 法	470x280x356	←	←	←	457x330x279	←	470x321x284
電 源	110,125,145,220, 50Hz	←	←	←	110,125,145,220, 50Hz or 117V,60Hz, 120W	←	←

表 25-4 Revox 36 シリーズの主な仕様

ン・モーターの巻線をスイッチで切替えている。リールは最大 10 インチ (25 cm)、したがって、2400 フィート (760m) テープ、3-3/4 インチ/秒で片道 2 時間の録音が可能である。テープの巻戻し時間は 90 秒、リールモーターがリール軸に直結なので結構速い。ブレーキはバンド式でソレノイドによって制御される。

テープモードは 5 ボタン切替式のスイッチで操作され、モーターやソレノイドをコントロールしている。スイッチは左から巻戻し、早送り、再生、停止、録音の順にあり、録音操作は録音と再生ボタンを同時に押すようになっている。

ヘッドはハーフトラックの消去ヘッドと録音・再生兼用ヘッドの 2 個、テープのヘッドへの圧着は普通 1 モーター式にみられる圧着パッドやガイドピンは使われていない。

入力はマイク、ラジオ/ホノ、AUX (それぞれハイ・インピーダンス形) をもっている。出力は 8 “コアクシアル・スピーカーを EL35 (6BQ5) のシングル、最大 3.5W のアンプで駆動している。

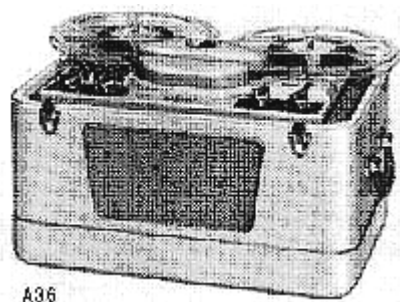


写真 25-4
Revox A36

B36 型(1956 年): 36A 型の 2 ヘッド式を 3 ヘッド式に改良したのが B36 型である。録音と再生が専用のヘッドになり、アンプも録音と再生が専用になる。録音時再生のモニターが可能となった。価格は A36 型の SFr.990. をそのまま据え置いた。トラック形式はハーフトラックとフルトラックの 2 種類が用意された。

C36 型 (1958 年): B36 型の 7-1/2 と 3-3/4 インチ/秒の 2 スピードに対し、15 と 7-1/2 インチ/秒のバージョンが追加された。アンプはハイ・インピ

ーダンス負荷であるが、カソード・フォロワー回路からライン出力 (1~1.5V) が得られるようになった。ライン出力は他のオーディオ機器に接続できるので、たいへん便利になった。

D36 型(1960 年): ルボックス最初のステレオモデルである (写真 25-5) ⁽²⁰³⁾。この時点では 2 トラック・ステレオで、モノの場合はハーフトラックとして、従来どおり使用できる。

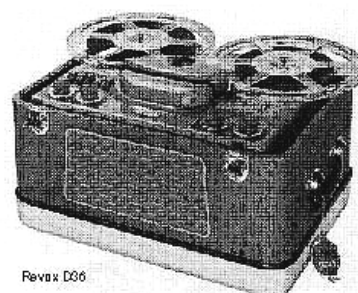
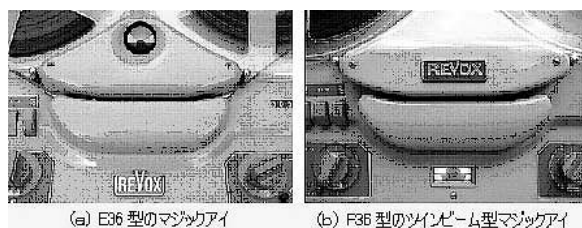


写真 25-5
Revox D26

録音レベルの監視は A 型以来マジックアイ管によっているが、ステレオの場合はチャンネル毎に切替えるか、両チャンネルのボタンを押して、左右ミクスされた状態で、マジックアイ表示している。

このモデル(D-36S)から米国での販売が代理店を通して 1960 年に始まっている⁽²¹¹⁾。米国価格は \$449.00 となっている。同じ表の中に Ampex 960 型(\$495.00)と Cocertone 505 型 (\$495.00) も載っていた。

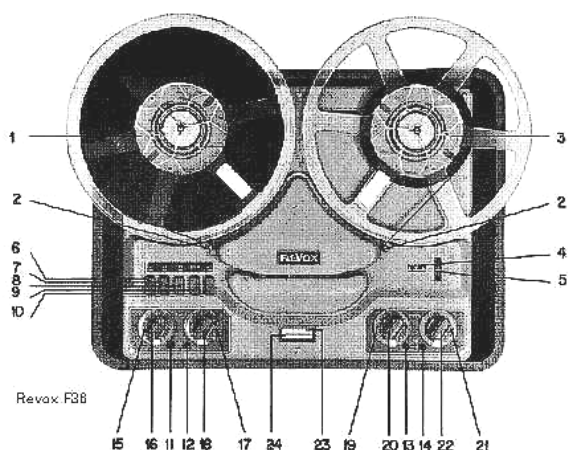
E36 型 (1961 年): 2 トラック・ステレオのほか、4 トラック・ステレオのバージョンも用意された。電気系ではエコーと多重録音能が追加された。また、マイク入力回路に 36 シリーズとしては始めて、トランジスターを採用した。このモデルは翌 1962 年、始めて英国で販売している。



(a) E36 型のマジックアイ (b) F36 型のツインペーム型マジックアイ

写真 25-6 Revox E36 と F36 のマジックアイ表示 ⁽¹⁹⁷⁾

F36 型 (1962 年) : 機能的には E36 型とほぼ同じであるが、異なる点は、アンプは全真空管式に戻っていること。マジックアイが各チャンネルを表示するツイン・ビーム型になってヘッドハウジングの手前に移ったことである(写真 25-6 (b) 参照)。写真 25-7 に操作面各部の名称を示す。



- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 供給リール | 13 黒色ボタン: 左チャンネル録音 |
| 2 テープガイド | 14 赤色ボタン: 右チャンネル録音 |
| 3 巻取りリール | 15 電源スイッチ |
| 4 テープカウンター | 16 音質調整: 反時計、低音増 |
| 5 カウンターリセット、電源パイロット | 17 モニター切替 |
| 6 押ボタン: 巻戻し | 18 音量調整 |
| 7 押ボタン: 早送り | 19 入力切替-Chan I |
| 8 押ボタン: 再生 | 20 録音レベル調整-Chan I |
| 9 押ボタン: 停止 | 21 入力切替-Chan II |
| 10 押ボタン: 録音 | 22 録音レベル調整-Chan II |
| 11 黒色ボタン: 3-3/4 ips | 23 録音レベル指示-Chan I |
| 12 赤色ボタン: 7-1/2 ips | 24 録音レベル指示-Chan II |

写真 25-7 Revox F36 の操作パネル面 (197)

G36 型 (1963-1967) : 1955 年に始まった 36 シリーズはこの G 型が最後となり、1967 年、A77 型に引き継がれることとなる。36 シリーズでは途中、E 型で一部にトランジスターを採用したが、F 型、G 型には全真空管式にもどり、A77 型になって、ようやく全トランジスター式のテープ録音機が登場する。G36 型は基本的には従来の 36 シリーズの機能と性能を維持してきたが、録音レベルの監視はマジックアイからようやく VU メーターに変わった(写真 25-8)。リールはこのモデルで米国規格の NAB 10-1/2" リールが使えるようになった。また、米国で

は当たり前になっていたが、リールサイズの切替えスイッチがついて、リールサイズによるテープのバックテンションの変化を少なくしている。テープ速度は 15 と 7-1/2 インチ/秒のバージョン、そしてトラック形式も 4 トラックと 2 トラック・ステレオのバージョンを用意してプロの使用に対応した。録音再生補償もプロの使用を配慮して CCIR 規格と NAB 規格のいずれかが選べるようになっている。内臓スピーカーは従来どおり 1 個で、モニターはチャンネル毎に切り替えて聴くことになるが、別途、外付のパワーアンプ付スピーカーシステムが用意され、ステレオ・モニターもできるようになっている。

名機といわれた 36 シリーズのうち、最後の G36 型について、詳しくは後日紹介したいと思っている。



写真 25-8 Revox G36 (203)

4. Studer シリーズ

Studer 27 の成功で、1955 年には A37 型(写真 25-9) と B37 型を開発した。さらに 1957 年、車載用の可搬型テープ録音機 B30 型が発売されている(写真 25-10)。

1958 年、スチューダー社は初めて、放送局用・可搬型ミキシング・コンソール Studer 69 型を作った。

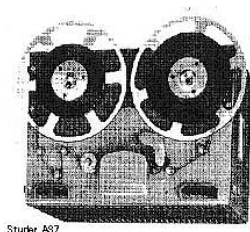
1960 年、名機といわれた C37 型がこの年に誕生している(写真 25-11)。詳しくは後日紹介するが、スチューダーのコンソール形テープ録音機の基本となったモデルである。まだ全真空管式であるが、テ

ープ駆動機構部はやがてくるマルチトラック録音にも備え、ヘビーデューティそのものである。ちなみに1964年には1インチ幅テープ、4トラック・4チャンネル録音機J37が作られている(写真25-12)。このモデルは後に英国のアービーロード・スタジオでビートルズの録音にも使われている。

1963年、この年に全トランジスター式の可搬型テープ録音機A62型を開発している(写真25-13)。

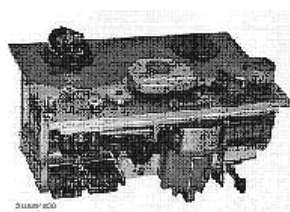
スチューダーのプロ機はこのあと1970年、A-80型が発表されるまでは37シリーズが続く。

(次号につづく)



Studer A37

写真 25-9
Studer A37 (202)



Studer B30

写真 25-10
Studer B30 (213)



写真 25-11 Studer C37 (202)

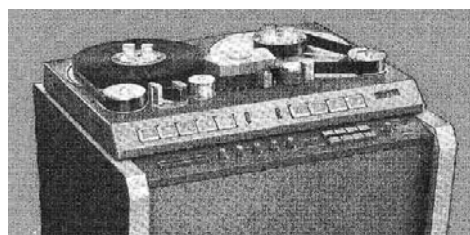
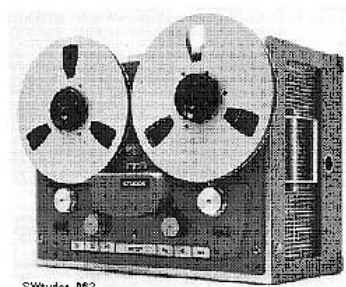


写真 25-12 Studer J37 (212)



SWtuder A62

写真 25-13 Studer A62 (203)

謝辞

前スチューダー・ジャパン(株)社長、池内宏行氏のご好意で、スチューダー社に関するたくさんの資料を提供いただきました。ここに謹んで謝意を表します。

【参考文献】(前号よりつづく)

- (201) A brief history of Studer-Revox (1998)
- (202) Studer-Revox From the First Recorder to World-Wide Exports (1973)
- (203) Revox 1948-1979 From prototype to world exports(1979)
- (204) Studer Revox 1948-1987 From prototype to world exports (1987)
- (205) Introducing Studer-Revox (1985)
- (206) Der beste Beweis für die Werbeständigkeit... die vilen Revox-Oldtimer (1952-1967)
- (207) Studer professional Audio GmbH,History
http://www.studer.ch/includes/history_
- (208) Revox,History
<http://www.revox.ch/index>.
- (209) Bruno Hochstrasser "50 years Studer"Swiss Sound, No.42, May 1998
- (210) M.Siegenthaler "In Memoriam, Audio Pioneer Dr.h.c.Willi Studer" Swiss Sound 37(1996)
- (211) "1960-1961 Tape Recorder Directory" Audio Device,Inc.(1960.09)
- (212) "Studer J37-4-1 Tape Recorder" Bulletin E409-5-koe
- (213) "STUDER und Revox-STUDER B30-Studio magnettonbandgerat" www.studerundrevox.de



ドイツ、ハイエンド・ショー2007を訪ねて

——写真で見る音の饗宴——

本誌編集委員 森 芳久

今年も恒例のドイツ、ハイエンド・ショーがミュンヘンで5月17日から20日の4日間にわたり開催された。

このドイツのハイエンド・ショーは1982年に第1回が開催され、2003年まではフランクフルト郊外のケンペンスキー ホテルで行われていたため、フランクフルト・ハイエンド・ショーとして親しまれてきた。

「Hearing is Believing」を鉄則に、ホテルの小部屋での試聴が中心の催しであった。当然のことながら、来場者の数を競うというよりは熱心なユーザーに焦点をあて、密度の濃いフレンドリーなコミュニケーションを目指したものである。世界的に衰退が懸念されるオーディオ関連のショーの中で、このドイツのハイエンド・ショーだけは堅調に推移してきている。規模拡大に伴い、2004年よりは会場をミュンヘンのMOC（ミュンヘン・オーダーセンター）のイベント会場に移し、今年はその4年目、通算26回を迎えた。

何事もそうであるように、当初は会場の移動に反対する声も聞かれたが、会場全体のスペースは平場スペースや、さらに余裕のある多くの小部屋や中型の部屋が確保でき、ミュンヘンでのハイエンドもさらに順調な伸びを示している。

今年は益々真空管アンプやアナログレコードプレーヤーが元気になっているのが目に付いた。この4日間、ミュンヘンのMOCは音の饗宴の場となり、かつてのオーディオ少年達が時を忘れて夢の広場を彷徨っていた。

ミュンヘンで発生したハイエンドの熱い風、今年もヨーロッパ大陸にそして世界に広がっていく。

ハイエンド協会発表の昨年と今年各数字の比

較は次表のとおりである。

	2006年	2007年	前年比
会場スペース	14000 平米	15500 平米	+10.7%
出展社数	210 社	220 社	+4.8%
来場ジャーナリスト	387 名	410 名	+5.9%
来場者(チケット購入者)	12090 名	12902 名	+6.7%

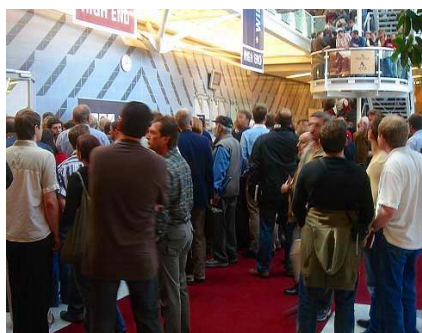
海外からの出展社は28%と昨年よりも大幅に増加し、また海外からのジャーナリストも増え、このショーがドイツだけではなく全世界から注目を浴びているのが分かる。ちなみに出展ブランド数は約700と過去最多となっている。



(写真1) 会場となったミュンヘン MOC の概観。市内センターから東に10km程の郊外にある。車で約20分。地下鉄のアクセスも可能。



(写真2) 入場料は一人10ユーロ、家族割引もある。



(写真 3) 開場前の長蛇の列、入場前から熱気が溢れる。



(写真 4) 人目を引くアバンギャルドのオールホーンスピーカー。最上級トリオシリーズの3ウェイホーンと低音ホーン2基の組み合わせで、歯切れの良いジャーマン・サウンドを朗々と響かせる。



(写真 5) ブリティッシュサウンドの代表格、タンノイのブース。サウンド・デモにはウエストミンスター・ロイヤル、530 リットルのコンプレックス・ホーンのエンクロージャーは威風堂々。アキュフェーズのアンプによる日英同盟サウンドが心地良く響く。



(写真 6) ラックスマンの 88 シリーズ。ドイツでもラックスマンの人気は高い。KT-88 プッシュプルアンプ、MQ-88、プリアンプ CL-88、フォノアンプ EQ-88、MC 用ヘッドアンプ MT-88 など、アナログチックな 88 シリーズ。



(写真 7) 日本にも上陸を果たしたノールウェイのエレクトロコンパニエのブース。映像を使ったサラウンドとピュア・ステレオのミックスのデモで、SA-CD プレーヤーECC-1によるサウンド・デモも行われた。



(写真 8) ドイツ、オーストリア、スイスなどドイツ

語圏で圧倒的人気を持つリンデマン。小規模メーカーながら早くから SA-CD プレーヤー開発に取り組み、今回は 3 作目の新製品 820S のデモ。早くもドイツのハイファイ雑誌で高得点を獲得、訪れたファンを魅了した。設計者のリンデマン社長とその夫人、営業担当のエリザベスさん。



(写真 9) 洒落た雰囲気ウィルソン・ベネースのブース。ここでもプログラムソースはアナログ・ディスクが活躍していた。



(写真 10) 真空管と最新の技術を組み合わせユニークな製品で人気を集めるドイツのオーディオメーカー T&A。昨年ベールを脱いだ真空管を用いた SA-CD プレーヤー D-10 は今年も大きな関心呼んでいた。



(写真 11) T&A 社開発責任者のローター・ヴィーマン氏。今年はさらにピュアオーディオファン向けのステレオ専用 SA-CD プレーヤー、マルチチャンネル用 SA-CD プレーヤー、さらには A&V を狙った SA-CD/DVD コンパチ機などラインナップを充実させてきている。



(写真 12) 宇宙人のような面白い形のスピーカーはオーストリアの TKE 社製。はたして音の方は？



(写真 13) ドイツでもベールを脱いだパイオニア製、ピュア・モルト・スピーカー。ビール党のドイツ人を酔わせることを大いに期待したい。



(写真 14) KEF が特別試聴室を構え発表した Muon。超弩級のデザインコンセプト・スピーカーだ。Muon とはクオークよりさらに小さな素粒子のこと。また Mu はムー大陸や日本の禅における「無」を意味しているという。ロス・ラブグローベによる美しいホルム。その磨き上げられたアルミの巨大なモニュメントはまさにムー大陸へのオマージュのようにも思える。4 ウエイ、計 8 個のユニットにより 20Hz から 100kHz をカバーする。最大出力は 118dB とこれも超弩級。



(写真15) B&Wの新製品600シリーズ。中型機ながらしっかりと兄貴分の800シリーズの技術やイメージを踏襲している。B&Wの世界への入門用。



(写真16) 新製品SACDプレーヤーP05とD/AコンバーターD05の前で、エソテリックの大間知社長。左はタンノイ、日本金属、エソテリック三社で開発したMG-10。音の秘密マグネシウム合金コーンが眩く光る。



(写真17 左上) BMWの後部に組み込まれたMBクワッドのカーオーディオ。

(写真18 左下) ジャガーXKにB&W

(写真19 右上) VW ツアレグにはダイナオーディオが装備されるなど、今年は名車とカー・オーディオの組み合わせのデモが目立った。



(写真20) 毎年定番になったB&Wのブース内でのライブ、今年はピアノ伴奏のジャズボーカルが熱演していた。



このショーの楽しみである。

(写真21) 会場ホワイエでも定期的にコンサートが開催され、ライブ演奏を間近に聴けるのも



かな地方音楽が楽しめる。

(写真22) 平場のメインブースでも通路際のスペースで演奏が繰り広げられる。バイエル独特の演奏など個性豊



(写真 23、24、25)
このショーのもう一つのお楽しみが、掘り出し物のアナログレコードやレアな CD の直販である。このブースがお目当ての客も少なくない。



(写真 28、29) 今回特別展示されたドイツ、ヴーリッツァー製のジュークボックス。

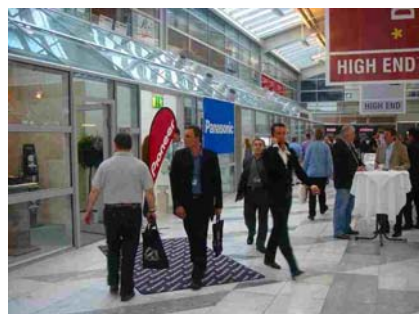
オリジナルはもちろん EP 盤であるが、この中の何台かは CD 用ジュークボックスとなっている。



(写真 26) 世界中のハイエンド・ショーには必ず現れる MA レコーディングスのトッド・ガーフィンケル氏、自ら録音した SA-CD ディスクをデモしながら販売している。



(写真 30) 日本より海外で名声の高いエアタイトのアンプ。その名前が示すように真空管アンプである。フラグシップ・モデルがこのモノラル・アンプ ATM2001。ドイツ国内価格は約 300 万円。三浦社長自らが世界を駆け回っている。



(写真 27) 会場 2 階のホワイエ、喫茶のできるコーナーや打ち合わせ場所などがあり、ここで再開を懐かしむオーディオ仲間も多い。



(写真 31) ドイツで神話的人気の光悦のカートリッジ。未だアナログ主役のお国柄だ。



(写真 32) スコットランドのリンの高級モデル AKURATE シリーズと、今年登場したターンテーブルの名機 SONDEK LP12 の改善モデル SONDEK LP12SE、初期モデル発売から実に 35 年目のモデルチェンジだ。マーケティング担当のマーチン・マックル一氏の説明にも力が入る。



(写真 35) 往年のアポジーを思わせるアナリシスオーディオのリボンスピーカ―OMEGA。駆動するのはテクニカルプレーンのモノラル・アンプ TBP-Zero。



(写真 33) 「光を聴く」をテーマに多くの真空管アンプを手がけるウエーバック オーディオ ラボの EC-300B。300B シングルのステレオアンプに開発者伊藤社長の執念が凝縮されている。



(写真 36) 今年の CES ラスベガスで発表された mbl の大型スピーカ―、101X (Extreme)。従来の 101 を上下に二つ重ね、サブウーハー部を独立、CES のデモのときよりも、音のチューニングが改善され定位も安定していた。今回は熱心な mbl ファン、Fone (イタリアのオーディオ・レーベル) のチェーザレ・リッチ氏自らが録音制作したディスクをデモ。



(写真 34) ターンテーブルの鬼才、ヨッヘン・レーク氏、昨年は最高級ターンテーブル Artus (118,000 ユーロ) を発表して話題をさらったが、今年は入門用の Classic Nero 20.5/40M を発表。ドイツ国内価格は日本円にすると約 32 万円、アーム、カートリッジは別売りだ。



(写真 37) ハイエンド・ショーのブースや製品案内などを情報満載の公式ガイドブック。定価 10 ユーロでなかなか便利なガイドブックである。但し、英語の併記があるもののドイツ語がメイン。

MEMBERS PLAZA



アントン・ブルックナー(1824-1896)

交響曲第9番ニ短調

ヤーブ・ヴァン・ズウェーデン(指揮)

オランダ放送フィルハーモニー管弦楽団

EXTON

OVCL-00276



凄絶な演奏のブルックナーの第9番

ヤーブ・ヴァン・ズウェーデンとオランダ放送フィルハーモニー管弦楽団によって、ブルックナーの交響曲第4番及び、第7番に続く3曲目となる第9番がSACD-Hybridでリリースされた。

名演と評価が高い、ジュリヒト、ヴァントにズウェーデンが加わろうとしているようである。

ロマン派の象徴ともいえる第4番と第7番の見事な演奏で、これらを得意と評されたズウェーデンであったが、厳しい生い立ちをもつ第9番に対する懸念は払拭され、見事な演奏を聴かせてくれている。

この曲は、1887年8月の第8番を終えて直ちに着手されたが、第8番の初演を託した指揮者レーヴェから拒否されて改定作業に入り、1890年3月に改定稿を終えるも、改定癖が昂じて第9番の再着手ができたのは1891年になり、アダージョを1894年11月に完成したが、健康上の理由から一時中断して1895年5月から再開するが、フィナーレは未完のまま翌1896年に世を去った。

残された楽譜は、壮大な第8番に対して更に厳粛にまでブルックナーの奥の深さを示唆するものであった。1903年ウィーンでレーヴェ指揮による初演では、レーヴェ自身の改定稿によるものであった。原作の初演は1932年4月ハウゼッガーの指揮で、既出版されていた改定稿との比較演奏を実現して、聴衆を驚愕させたのであった。

演奏はズウェーデン特有の楽譜の忠実性を再現

させることを一義として、オーケストラの自立性がこれに応えた演奏が印象的である。第1楽章は冒頭から美しい金管と美しい弦に木管が加わりながら、共に効果的なブルックナーを歌い上げ、展開部では3つの主題が明快に進行し、再現部でもフレーズが明確で豊かな表現の演奏が極めて効果的である。第2楽章のテンポとリズムが小気味良く、リスナーに不安を与えない演奏が進み、木管が自己主張をしながら終結させていく。第3楽章は作者自身の「私が書いた最も美しい緩徐楽章」と言わしめた楽章を意識したようなズウェーデンの素晴らしく美しい演奏を聴かせてくれ、全体的に、分り易く美しさを備えたブルックナーを楽しませてくれる。

2006年6月、ヒルヴェルサム(MCO)スタジオでの録音のSACD-Hybrid盤である。広がりや奥行きが素晴らしく、オーケストラのスケール感を体験させてくれる優れた録音である。CD-Layerではレンジ感と豊かな響きを備えバランスの良い音質が体験できる。SACD.2ch-Layerでは、更に質的な再生品質が高まり、響きも豊かさを増して焦点深度が深まり繊細でシビアな音像の定位となって魅了される。マルチch-Layerでは更に響きが豊かになり、オーケストラの音の動きと美しい音色が見えてくるような優れた音質となって楽しませてくれる。

大林國彦(会員番号0799)

MEMBERS PLAZA



「硫黄島からの手紙」

監督：クリント・イーストウッド

キャスト：渡辺 謙/二宮和也/

伊原剛志/加藤 亮/中村獅童/裕木奈江

Warner

DLV-Y13714



知らなかった硫黄島の攻防史

第2次世界大戦の激戦地「硫黄島」をテーマにした2部作の日本側から見たバージョン「硫黄島からの手紙」がDVDとなってリリースされた。

2006年、硫黄島の地中から数百通もの手紙が発見された。61年前の1945年、この島で戦った男達が家族宛に書き残した、届くことのない手紙である。この手紙に綴られた彼らの素顔と家族が住む祖国への思いを知る程に、硫黄島での日々を心を震わさずにはいられず、2度のアカデミー賞を受賞したクリント・イーストウッド監督が日本側に立脚して描いた、キャスト全てを日本人にして、日本語の台詞だけとしたハリウッド作品である。

1945年2月19日、アメリカ軍の上陸で始まった硫黄島を巡る攻防は、アメリカ側の圧倒的な戦力の前に、5日もあれば終結することを予想していたが、36日に及ぶ歴史的な長期戦へと変貌したのである。硫黄島決戦への司令官に任命された栗林忠道中将（渡辺 謙）の使命は、戦いに勝つことではなく本土決戦を1日でも遅らせることだけであった。

即ち、負けることが明白な戦いに命をかける宿命の男であった。硫黄の臭気に食料も飲み水も満足に無い灼熱の島に降り立った栗林中将は、長いアメリカ赴任の経験をもちアメリカ軍の合理主義を会得していた人で、ここで掘る地下要塞が圧倒的なアメリカ軍の兵力を迎え撃つ秘策としたものであった。強いリーダーシップで武士道の本質を發揮して、負ける

戦いであっても最後まで生き延び、本土にいる家族のために一日でも長く島を守り抜くことの目的を明示、「死ぬな」と命令して歴史に残る36日間の激戦を戦い抜くことになるのである。

若い西郷一等兵（二宮和也）は敗北が明白になっても、本土に残る若い妻との再会の約束を果たそうと、「生きて帰る」ことを願いながら、苦しみを分け合う仲間達、様々な対立や死別によって気付く命の尊さと絆を知ることになる。これらは現代でも通じる要素でもあり、命令とは言え、服従しなければならない立場を巧みに描いて見せている。

イーストウッド監督は我々以上に日本人をよく熟知し理解しており、美しい武士道の世界を描いているのである。

全体に脱色したフィルム・トーンによる映像が悲惨な戦争映画を助長しており、洞窟内など比較的暗い映像が多い中、スポット的に焦点を合わせる照明の設定が素晴らしく、繊細な映像の創出と併せて極めて優れた映像設計であると言える。

地下洞窟内での生活雑音や、艦砲射撃や爆撃による不気味な低音域の地響きなどが周囲から鳴り渡る音がリアルで恐怖感さえ感じさせるサラウンド・サウンドなど、優れた音響設計は流石アメリカ映画である。センター・サウンドを重視した音響設定になっており、台詞が明瞭で美しい。

幾度観ても飽き足りない作品である。

大林國彦（会員番号 0799）

協会事業関連資料

平成 18 年度事業報告書

(平成 18 年 4 月 1 日から平成 19 年 3 月 31 日まで)

本協会は定款の目的に従い、人々が日常的に良い音に接して人間性を豊かにし、生活文化と産業の発展に貢献する立場から、オーディオ及びオーディオ・ビジュアル（以下オーディオ等）に関する調査及び研究、普及および啓発、基準の作成、情報の収集および提供、展示会の開催、人材の育成、内外関係機関等との交流および協力等、本会の目的を達成するために必要な事業を実施しました。

平成 18 年度事業の重点は、広く多くの人達を対象にオーディオ等の基本知識と利用法および最新動向を伝えて一層の普及・啓発を図る目的で会費規則や会報の発行形態等を改め、Web 活用時代に即した情報提供のインフラ整備がほぼ完了し、普及活動の具体化のための普及推進部会を設けて活動策を諮問して視聴体験機会拡大のための情報提供、青少年育成のためのイベント協力等に着手しました。

平成 18 年度に実施した主たる事業は定款第 4 条各号に沿った通りであります。

（第 1 号）オーディオ等に関するソフト、ハード、視聴環境の調査及び研究

普及推進部会を設けて一般者を対象としたオーディオ等の普及・啓発に必要な事項を審議し、視聴体験機会の拡大、青少年への啓発活動、サラウンドの啓蒙推進をテーマに定め、具体的な普及推進活動に着手しました。また、サラウンド啓蒙のためのホームページの充実に必要な事項の調査を実施して新技術内容を都度紹介し、A&V フェスタにおいては立体音響をテーマとしたセミナーを行い研究最前線の成果紹介に協力しました。

（第 2 号）オーディオ等に関する普及及び啓発

Web 利用の個人賛助会員の入会手続き簡易化と無料化を行い、インターネットを活用したオーディオ等の普及・啓発活動の対象者層の拡大をはかり、ほぼ半年間で 500 名強が入会しました。

前記第 1 号に沿った普及・啓発活動として、「音の日」を中心に視聴体験のできるショールーム等を紹介し、音の科

学への理解を深める小中学生対象のイベントを実施しました。

「音の日」には、聴覚の素晴らしさの啓発活動を行うエッセイストの三宮麻由子氏を「音の匠」として顕彰し、一部の一般紙、ラジオ放送等でも報道され一般者が音への関心を高める活動の一端となりました。

（第 3 号）オーディオ等に関する基準の作成

オーディオエンジニア及び一般カスタマーに向け、再生音の評価や測定に役立つ CD、DVD 等の頒布を行いました。

（第 4 号）オーディオ等に関する情報の収集及び提供

情報提供の迅速化と配布先の拡大を目的として機関誌をメール配信の会報『JAS ジャーナル』に改め、特集号 4 冊、通常号 4 冊を発行しました。これに伴い JAS ホームページの内容を更新しました。JAS ホームページは年間 28 万ページビューの利用があり前年比 1.4 倍となりました。

従来の「マルチチャンネルオーディオ」ホームページを「サラウンド Web」に更新しました。サラウンド Web は検索エンジン対策の効果で年間 66 万ページビューの利用があり前年比 2.3 倍となりました。

（第 5 号）オーディオ等に関する展示会開催

パシフィコ横浜において 9 月 21 日～24 日に展示会「A&V フェスタ 2006」を実施し、多くの出展社と入場者を集め、一般カスタマーを対象としたオーディオ等の最新動向の普及・啓蒙面において大きな役割を果たしました。

（第 6 号）オーディオ等に関する人材の育成

販売店社員や技術者等を対象とする人材育成事業について、ネットの活用やコンファレンスの開催についての事前調査を行いました。

（第 7 号）オーディオ等に関する内外関係機関等との交流及び協力

第 13 回日本プロ音楽録音賞を関連団体と共催して実施し、「音の日」に 3 部門 8 作品の制作技術者を表彰しました。また、オーディオソフトの制作技術向上を目的とするプロフェッショナルオーディオ協議会に参画して 6 月に開催された「映画テレビ技術 2006」に協力しました。

協会事業関連資料

平成18年度収支計算書

(平成18年4月1日から平成19年3月31日まで)

収入の部

(単位:千円)

	平成18年度収入予算			平成18年度収入実績			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1. 前期繰越	44,630	22,052	22,578	44,630	22,052	22,578			
2. 会費(含入会金) ⁽¹⁾	41,940	41,940		43,106	43,106		+1,166	+1,166	
3. 特別会費									
4. 事業収入	93,650	2,450	91,200	95,290	2,210	93,080	+1,640	-240	+1,880
普及・啓発 ⁽²⁾	670	670		795	795		+125	+125	
評価用音源	1,780	1,780		1,415	1,415		-365	-365	
展示会	91,200		91,200	93,080		93,080	+1,880		+1,880
5. 助成金収入 ⁽³⁾	3,300		3,300	3,000		3,000	-300		-300
6. その他収入 ⁽⁴⁾	840	840		977	977		+137	+137	
7. (2~6項)計	139,730	45,230	94,500	142,373	46,293	96,080	+2,643	+1,063	+1,580
8. 引当金取崩 ⁽⁵⁾	7,800	6,000	1,800	7,800	6,000	1,800	+0	+0	+0
9. 当期収入計	147,530	51,230	96,300	150,173	52,293	97,880	+2,643	+1,063	+1,580
10. 収入計	192,160	73,282	118,878	194,803	74,345	120,458	+2,643	+1,063	+1,580

(注記) (1) 実績 正会員25社、6団体、賛助会員32社、一般222名、シニア135名 合計357名 会友51名 休眠12名 合計420名 (平成19年3月31日現在)

(2) 音の日会費、音の日行事分担金等

(3) 展示会開催に対する助成金(Sarah)

(4) 新春の集い会費:385、サウンドホームページ協力金:590(JEITA)その他

(5) 情報整備引当金:6,000、租税引当金:1,800

支出の部

	平成18年度支出予算			平成18年度支出実績			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1. 事業支出	121,560	19,430	102,130	113,411	13,698	99,713	-8,149	-5,732	-2,417
調査・研究	1,000	1,000		0	0		-1,000	-1,000	
普及・啓発 ⁽¹⁾	9,500	9,500		3,689	3,689		-5,811	-5,811	
基準の作成(音源)	1,050	1,050		858	858		-192	-192	
情報の収集・提供 ²⁾	7,130	7,130		8,401	8,401		+1,271	+1,271	
展示会の開催 ⁽³⁾	102,130		102,130	99,713		99,713	-2,417	+0	-2,417
人材の育成	0			0	0		+0	+0	
対外交流 ⁽⁴⁾	750	750		750	750		+0	+0	
2. 管理費 ⁽⁵⁾	3,060	3,060		2,955	2,955		-105	-105	
3. 事業管理費 ⁽⁶⁾⁽⁷⁾	38,786	27,286	(7) 11,500	30,986	19,486	11,500	-7,800	-7,800	+0
4. 情報整備引当金 ⁽⁸⁾	1,054	1,054		1,053	1,053		-1	-1	
5. 普及事業引当金 ⁽⁹⁾				12,000	12,000		+12,000	+12,000	
6. 記念事業引当金 ⁽¹⁰⁾	250	250		250	250		+0	+0	
7. 当期支出計(1~6)	164,710	51,080	113,630	160,655	49,442	111,213	-4,055	-1,638	-2,417

収支バランス

7. 当期収支差額	-17,180	150	-17,330	-10,482	2,851	-13,333	6,698	2,701	3,997
8. 次期繰越収支差額	27,450	22,202	5,248	34,148	24,903	9,245			

(注記) (1) 音の日行事:2,926 普及推進事業費:763

(2) ホームページ制作・運用費:8,401

(3) 特別会計(展示会)の事業費(内訳:別紙経費内訳)

(4) 他団体への協力金(スタジオ協会:500、デジタルコンテンツ協会:200、展示会協会:50)

(5) 協会一般事業の管理経費(内訳:別紙表1)

(6) 一般会計事業に伴う固定的経費(内訳:別紙表1)

(7) 特別会計(展示会)事業活動に伴う固定的経費(内訳:別紙表1)

(8) 会計・会員等の情報管理システム更新のための引当金

(9) 視聴体験機会の提供等の普及活動のための引当金

(10) 周年記念事業のための引当金

協会事業関連資料

平成 19 年度事業計画書

(平成 19 年 4 月 1 日から平成 20 年 3 月 31 日まで)

オーディオシステム及びオーディオ・ビジュアルシステム（以下オーディオ等）のデジタル化とユビキタス化の進展にともない、オーディオ等のソフト・ハード・視聴環境が多様化する中において、本協会は人々が音楽等のコンテンツに込められた良い音に接して人間性を豊かにし、オーディオ技術・文化・産業の発展に貢献するために、オーディオ等の『調査及び研究、普及及び啓発、基準の作成、情報の収集及び提供、展示会の開催、人材の育成、内外関係機関との交流及び協力』などの公益事業を重点的かつ効率的に進めます。

平成 19 年度においては、「日々に進化するオーディオ等の周知」「携帯(メモリー)オーディオからホームオーディオ・カーオーディオへのステップアップ促進」「ビデオ・放送等のサラウンド・サウンド啓蒙」等を主要テーマに据えて、ネットによる積極的な広報活動と展示会等の各種イベントでの体感勧誘などを通して、広く一般の人達を対象とするオーディオ等の基本知識の向上と上手な利用法の伝達に努めると共に、次代を担う青少年がオーディオ等への関心をたかめるための普及・啓発活動を行います。

平成 19 年度の主たる事業計画は、定款第 4 条各号に沿った通りです。

（第 1 号）オーディオ等に関するソフト、ハード、視聴環境の調査及び研究

ピュアオーディオ・サラウンドシステム・ホームオーディオ・カーAV・携帯オーディオ等の公益的な普及・啓発活動に必要な事項の調査および研究を行います。

これらの事業活動の中・長期的な視野で検討し、平成 20 年以降の新法人制度下での協会事業の在り方を検討するために事業検討委員会(仮称)を設けます。

（第 2 号）オーディオ等に関する普及および啓発

前記の主要啓発テーマに関する普及・啓発活動を推進します。インターネット活用による情報提供、視聴体験機会の提供、青少年向けのイベント、「音の日」行事等、一般者への普及・啓発に重点を置いて実施します。

（第 3 号）オーディオ等に関する基準の作成

オーディオ等の視聴環境の向上に役立つソフトの頒布を継続すると共に、調査及び研究の進展に従い新たな視聴テスト音源の提供を進めます。

（第 4 号）オーディオ等に関する情報の収集及び提供

「JAS ホームページ」及び「サラウンド Web」の内容充実に努め、機関誌「JAS ジャーナル」の配信先拡大と合わせてネット手段による普及・啓発を推進します。

新たに JAS ホームページ内に携帯オーディオファン向けの特設ページを作り、さらに広がりのあるオーディオへの関心を高めるための啓発を行います。

（第 5 号）オーディオ等に関する展示会開催

会期・会場・会場構成等を一新して「A&V フェスタ 2008」を平成 20 年 2 月 23 日～25 日にパシフィコ横浜カンファレンスセンターにて開催します。

また、オーディオ等に関連する各種展示会の連係化を目指すと共に、地域オーディオイベント等への後援協力を行います。

（第 6 号）オーディオ等に関する人材の育成

協会創立 55 周年目にあたり記念事業委員会を設置し、記念事業ならびに販売店従事者や技術者を対象としたコンファレンス等の開催を企画・推進します。

（第 7 号）オーディオ等に関する内外関係機関等との交流及び協力

「日本プロ音楽録音賞」を日本音楽スタジオ協会・日本レコード協会・日本ミキサー協会・演奏家権利処理合同機構と共催し、優れた音源の助成とともにソフト・ハード間の関係を深めます。

また、プロフェッショナルオーディオ協議会に継続参加して民生・プロ分野間の連携を深めます。

協会事業関連資料

平成19年度収支予算書

(平成19年4月1日から平成20年3月31日まで)

収入の部

(単位:千円)

	平成18年度収入実績			平成19年度収入予算案			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1. 前期繰越	44,630	22,052	22,578	34,148	24,903	9,245	-10,482	+2,851	-13,333
2. 会費(含入会金) (1)	43,106	43,106		40,300	40,300		-2,806	-2,806	
3. 特別会費									
4. 事業収入	95,290	2,210	93,080	66,872	1,619	65,253	-28,418	-591	-27,827
普及・啓発 (2)	795	795		545	545		-250	-250	
評価用音源	1,415	1,415		1,074	1,074		-341	-341	
展示会	93,080		93,080	65,253		65,253	-27,827		-27,827
5. 助成金収入 (3)	3,000		3,000	0			-3,000		-3,000
6. その他収入 (4)	977	977		750	750		-227	-227	
7. (2~6項)計	142,373	46,293	96,080	107,922	42,669	65,253	-34,451	-3,624	-30,827
8. 引当金取崩 (5)	7,800	6,000	1,800	14,053	14,053		+6,253	+8,053	-1,800
9. 当期収入計	150,173	52,293	97,880	121,975	56,722	65,253	-28,198	+4,429	-32,627
10. 収入計	194,803	74,345	120,458	156,123	81,625	74,498	-38,680	+7,280	-45,960

- (注記) (1) 法人会員 正:25社、6団体、賛助32社、個人会員 一般:222名、シニア:135名 会友:51名 休眠:12名 合計420名 (平成19年3月31日現在)
平成19年度予算案 法人会員数:平成18年度と同数、個人会員 一般:177名、シニア:106名、会友:50名 合計:333名
- (2) 音の日会費:125、音の日行事分担金:420、図書売上:29、イベント参加費:24
- (3) 展示会開催に対する助成金 Sarah:3,000千円 横浜市:300千円
- (4) 平成18年度その他収入内訳 新春の集い会費:385、サラウンドHP協力金(JEITA):590
平成19年度予算案 新春の集い会費:350、サラウンドHP協力金(JEITA):400
- (5) 平成18年度引当金内訳 情報整備引当金:6,000、租税引当金:1,800
平成19年度予算案 情報整備引当金:1,053、普及事業引当金:12,000、記念事業引当金:1,000

支出の部

	平成18年度支出実績			平成19年度支出予算案			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1. 事業支出	113,411	13,698	99,713	84,374	18,746	65,628	-29,037	+5,048	-34,085
調査・研究	0	0		0	0		+0	+0	
普及・啓発 (1)	3,689	3,689		7,300	7,300		+3,611	+3,611	
基準の作成(音源)	858	858		916	916		+58	+58	
情報の収集・提供 (2)	8,401	8,401		7,280	7,280		-1,121	-1,121	
展示会の開催 (3)	99,713		99,713	65,628		65,628	-34,085		-34,085
人材の育成	0			(4) 2,500	2,500		+2,500	+2,500	
対外交流 (5)	750	750		750	750		+0	+0	
2. 管理費 (6)	2,955	2,955		3,140	3,140		+185	+185	
3. 事業管理費	30,986	(7) 19,486	(8) 11,500	40,980	33,980	7,000	+9,994	+14,494	-4,500
4. 情報整備引当金 (9)	1,053	1,053		529	529		-524	-524	
5. 普及事業引当金 (10)		12,000		0	0		-12,000	-12,000	
6. 記念事業引当金 (11)	250	250		250	250		+0	+0	
7. 当期支出計(1~6)	160,655	49,442	111,213	129,273	56,645	72,628	-31,382	+7,203	-38,585

収支バランス

8. 当期収支差額	-10,482	2,851	-13,333	-7,298	77	-7,375	+3,184	-2,774	+5,958
9. 次期繰越収支差額	34,148	24,903	9,245	26,850	24,980	1,870			

- (注記) (1) 平成18年度内訳 音の日行事:2,926、特設ウェブ、タイアップ行事:1,344
平成19年度予算案 音の日行事:2,700、試聴体験会、タイアップ行事他:4,600
- (2) ホームページ制作・運用費
- (3) 特別会計(展示会)の事業費(内訳:別紙 経費内訳)
- (4) 創立55周年記念事業
- (5) 他団体への協力金(スタジオ協会:500、デジタルコンテンツ協会:200、展示会協会:50)
- (6) 協会一般事業の管理経費(別紙 表1.経費内訳)
- (7) 一般会計事業に伴う固定的経費(別紙 表1.経費内訳)
- (8) 特別会計(展示会)事業活動に伴う固定的経費(別紙 表1.経費内訳)
- (9) 情報管理システム整備のための引当金繰入
- (10) 普及事業のための引当金繰入
- (11) 周年記念事業のための引当金繰入

協会事業関連資料

平成19年度 役員名簿

(平成20年6月 通常総会まで) (ご就任順)

役員	氏名	所属
会長	鹿井 信雄	
副会長	周田 悦治	松下電器産業株式会社
副会長	大津 雅弘	ソニー株式会社
副会長(新任)	校條 亮治	パイオニアマーケティング株式会社
副会長(新任)	中沢 隆平	日本ビクター株式会社
専務理事	藤本 正熙	
理事	佐倉 住嘉	ポーズ株式会社
理事	山崎 芳男	早稲田大学
理事	栗原 昭	アルパイン株式会社
理事	谷口 好市	ラオックス株式会社
理事	松下 和雄	株式会社オーディオテクニカ
理事	齋藤 重正	アキュフェーズ株式会社
理事	橘 秀樹	
理事	八幡 泰彦	株式会社エス・シー・アライアンス
理事	田中 純一	社団法人日本レコード協会
理事	田村 英二郎	株式会社ケンウッド
理事	西野 司	ラックスマン株式会社
理事	濱崎 公男	NHK放送技術研究所
理事	穴澤 健明	株式会社ディアールエムソリューションズ
理事	宮坂 榮一	武蔵工業大学 環境情報学部
理事	森 芳久	
理事	後藤 正男	株式会社ディーアンドエムホールディングス
理事	内沼 映二	株式会社ミキサーズ・ラボ
理事	中山 二三夫	ヤマハエレクトロニクスマーケティング株式会社
理事	松田 賢一	株式会社メディアコミュニケーションズ
理事	沢口 真生	
理事	中西 康之	三菱電機株式会社
理事(新任)	寺川 雅嗣	シャープ株式会社
理事(新任)	三ツ木 宏	株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
理事(新任)	加藤 裕一	ビクターエンタテインメント株式会社
監事	坊上 卓郎	
監事	畑仲 公夫	
特別顧問	中島 平太郎	
顧問	山本 武夫	

協会事業関連資料

平成 19 年度 日本オーディオ協会組織図

(平成 19 年 6 月 7 日現在)

会 長 鹿井 信雄
 副会長 周田 悦治
 大津 雅弘
 校條 亮治
 中沢 隆平
 専務理事 藤本 正熙
 ほか 理事 24 名
 監 事 2 名
 特別顧問 中島 平太郎、顧問 1 名

